

今週の為替相場見通し(2021年11月15日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		112.73 ~ 114.30	113.92	112.50 ~ 115.00
ユーロ	(ドル)		1.1433 ~ 1.1608	1.1443	1.1350 ~ 1.1550
(1ユーロ=)	(円)		130.22 ~ 131.41	130.38	129.50 ~ 131.50
英ポンド	(ドル)		1.3354 ~ 1.3608	1.3411	1.3270 ~ 1.3470
(1英ポンド=)	(円)	*	152.38 ~ 153.74	152.77	151.20 ~ 153.70
豪ドル	(ドル)		0.7277 ~ 0.7432	0.7330	0.7250 ~ 0.7450
(1豪ドル=)	(円)	*	83.00 ~ 84.18	83.50	81.80 ~ 85.30

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1)今週の予想レンジ: 112.50 ~ 115.00 円

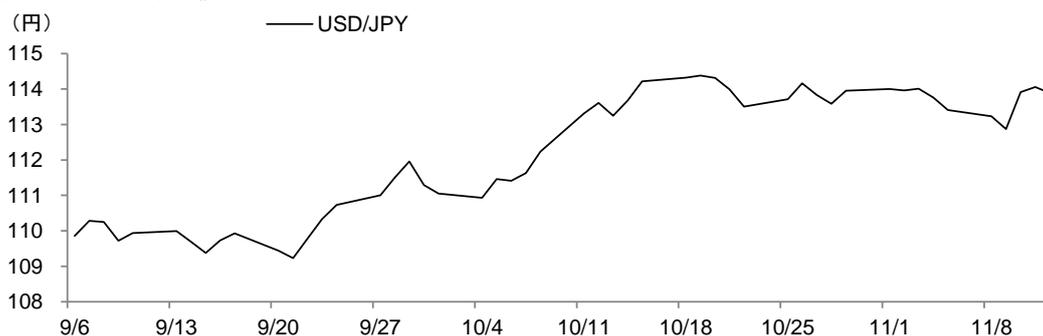
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半に高値を記録した。週初8日、113.50円付近でオープンしたドル/円はじり高に推移し上値を伸ばすも、海外時間にクラリダFRB副議長のハト派な発言を受け米長期金利が低下、ドル/円も113円台前半まで下落。その後は米金利が上昇に転じると下げ止まり、113円台前半で小動きとなった。9日、株式市場や米金利の軟調推移を背景に一時週安値の112.73円まで続落。海外時間に一時113円台前半まで回復も上値は重く、その後は米金利低下に伴うドル売り圧力に押され再び112円台後半まで値を下げた。10日、日本時間は米10月CPIの発表を控え112円台後半で動意に乏しい動き。海外時間に公表された米10月CPIは市場予想を上回る力強い結果となり米長期金利が上昇。ドル/円も急上昇し、114円を上抜けたが、その後は米株の下げ幅拡大を受け113円台後半まで軟化した。11日は前日のドル買いの流れが継続、一時114.15円まで上値を伸ばすも、一巡後はポジション調整の動きから113円台後半まで下落。米国休場の中、狭いレンジで方向感に欠ける値動きとなった。12日、米金利上昇を受けて週高値となる114.30円まで上昇したものの、その後はドル買い一服。米国時間に発表された米11月ミシガン大学消費者信頼感指数が予想に反して悪化したことで113円台後半まで下落し、113円台後半で越週した。

今週のドル/円は上値の重い動きを予想する。11日(木)に発表された米10月CPIは1990年以来の高水準となりインフレ圧力の高さが確認される結果となった。市場ではインフレを背景に早期利上げ観測が高まっている。米CPIの結果を受けてFED高官の利上げに対する姿勢に変化はあるのか注目される中、今週は19日(金)にクラリダFRB副議長が発言するほか、各連銀総裁の発言が多く予定されている。ただ、FRBが急速に利上げに対する姿勢を変えるとは思えないほか、バイデン米大統領もCPI発表後にインフレ抑制が最優先だと発言しており、FRBがインフレが一時的との見方を変えるには至らないと考える。早期利上げ観測が落ち着くとドル/円も上値の重い展開になると予想する。

(3)先週末までの相場の推移

先週(11/8~11/12)の値動き: 安値 112.73 円 高値 114.30 円 終値 113.92 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1)今週の予想レンジ: 1.1350 ~ 1.1550 129.50 ~ 131.50 円

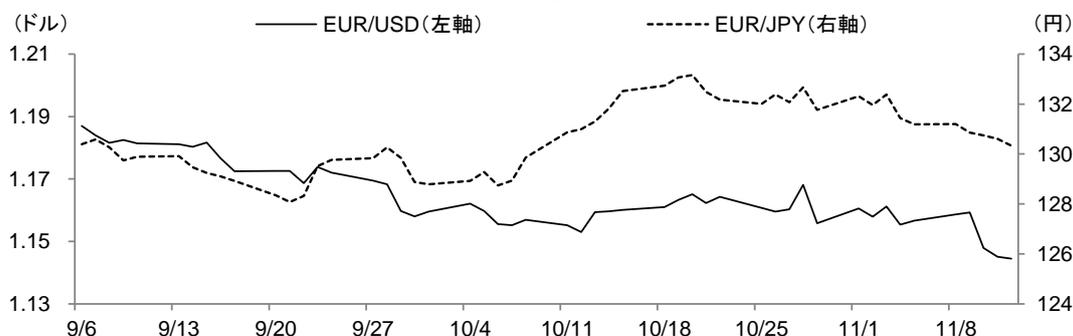
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は軟調地合いとなり、年初来安値を更新した。週初8日、1.1565付近でオープンしたユーロ/ドルは、米金利上昇に伴うドル買いから、1.15台付近で軟調に推移していたが、その後はクラリダFRB副議長の利上げに慎重な発言や米長期金利の低下に1.15台後半まで上昇した。9日、ユーロ/ドルはドル売りが優勢となって一時週高値の1.1608まで上値を伸ばす場面もあったが、その後は株式市場の下落を背景にリスク回避のドル買いが強まり1.15台後半まで下落。終日を通して1.16を挟んで方向感に欠ける展開となった。10日、ユーロ/ドルはドル買いが強まり1.15台後半で上値の重い展開が継続。海外時間に入り発表の米10月CPIの強い結果や米長期金利上昇を背景に1.14台後半まで急落した。11日、ユーロ/ドルは1.14台後半で軟調に推移しじり安の展開。米国が休場の中、1.14台後半まで急落した。12日のユーロ/ドルは引き続き上値重く推移し週安値の1.1433まで続落。その後米11月ミシガン大学消費者信頼感指数が市場予想を下回ったことで1.14台後半まで反発する場面も見られたが、結局1.1440台で越週した。対円では、8日に131.20円台後半でオープンしたユーロ/円は、9日日経平均株価が下落する中、130.70円台まで下落。10日に米10月CPIが強い結果になったことで、ドル/円が上昇する中、ユーロ/円は131.40円まで上昇。しかし滞空時間は短く、ユーロ/ドルが下落する中12日に週安値である130.22円まで下落し、130.30円台で越週した。

今週のユーロ/ドルは、上値の重い展開を予想する。先週は米10月CPIが31年ぶりの高い伸びとなったことを受けたドル買いからユーロが下落した。今週も米国におけるインフレ期待の上昇からユーロは上値重く推移すると考える。また、ドイツでコロナの感染者が急増していることもユーロの上値を抑える要因となろう。ドイツでは1日の新規感染者数が5万人を超えており過去最多を更新している中、今後再び行動制限が強化される可能性も高く、ユーロ圏経済の重しとなろう。金融政策に目を向けてもタカ派メンバーの一人であるクノット・オランダ中銀総裁は先週「利上げの条件が来年に達成される可能性は極めて低い」と述べており、同じくタカ派のホルツマン・オランダ中銀総裁も「2022年の利上げの可能性は低い」と述べている中、12月のECBに向けて政策変更の期待感が高まりづらいと考える。以上のことより今週のユーロ/ドルは引き続き上値重く推移する展開を予想する。重要な経済指標としては、15日(月)にユーロ圏9月貿易収支、16日(火)にユーロ圏7~9月期GDP(修正値)、17日(水)にユーロ圏10月消費者物価指数(確報)、19日(金)にユーロ圏9月経常収支の発表を予定している。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/8~11/12)の値動き: (対ドル) 安値 1.1433 高値 1.1608 終値 1.1443
(対円) 安値 130.22 高値 131.41 終値 130.38



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.3270 ~ 1.3470 151.20 ~ 153.70 円

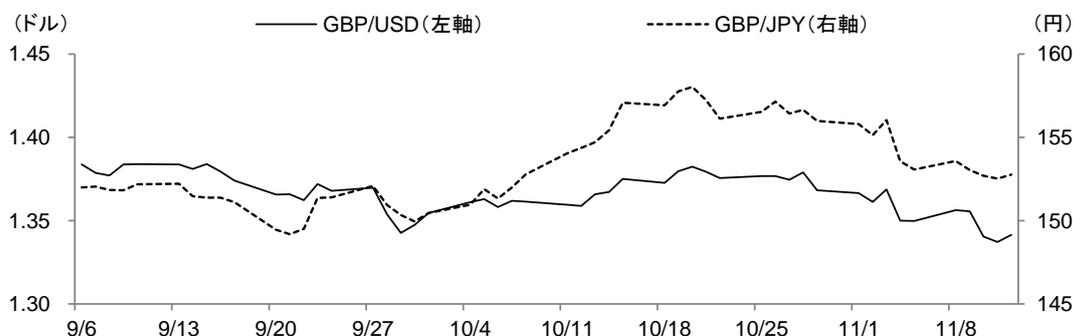
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは明確に下落、直近安値(9月29日の1.3412)を割り込み、12日のアジア市場で1.3354と、昨年12月来の安値をつけた。ただし、対円での下落は僅かな値幅にとどまり、対ユーロでは逆に堅調気味の推移を支配的とした。こうした値動きは、対ドルでのポンド安も、主にドル高の結果だった可能性をうかがわせた。実のところ、週明け8日、ポンドはまず全面高が先行した。英中銀金融政策委員会のメンバーでチーフエコノミストのビル委員が、英国の賃金上昇の強さに警戒感を示したことがそのきっかけを与えたものと考えられた。しかし、10日以降は、ドルの主要通貨に対する明確な全面高が通貨市場の方向感を形作った。同日発表された米10月CPIが、強めの市場予想(前月比+0.6%)を更に上回る強い上伸(同+0.9%)を示したことで、米連銀による早期利上げ観測が台頭、ドル買いを促した。更に追い討ちをかけたのが、翌11日に発表された英7~9月期GDPに対する失望。前期の前年比+23.6%から、市場予想同+6.8%への減速が見込まれたところ、発表は同+6.6%と下振れた。もっとも、その後ポンドは、確かに売り込まれはしたものの、対ドルを含め、対円、対ユーロでの下げ幅も限定的にとどまった。

今週の英ポンド相場は、続落を予想。ポンド続落を予想するのは、ドルの続騰を予想するから。ポンドは先週、対ドルで直近安値(9月29日の1.3412)を下回り、1.35水準を明確に割り込んで週の取引を終えた。1.35水準は、2019年12月、2020年9月に2度天井を打って反落し、2020年末/21年初に上抜けて、その取引水準を1.35~1.42水準に切り上げた、いわゆる「ピボット(転換点)」と言える水準。同水準を明確に割り込んで週の取引を終えたことで、あくまでもテクニカルなサインに過ぎないものの、もう一段のポンド/ドルの下落を中心に見込む。また、同様のテクニカル分析はユーロ/ドルの1.15水準にも当てはまる(ユーロ/ドルの1.15水準の方が、ピボットとしての意味はむしろ重い)。これをドル高と見るのであれば、その背景には、米連銀による金融引締め(利上げ前倒し)観測という、テクニカル要因を超えた要因も見つかるであろう。一方で、引き続き、年内利上げ開始の可能性も燦々英中銀だが、英金利短期先物(12月限)に読み取れる、今月4日の利上げ見送りで大きく萎んだその観測は、12日、僅かではあるものの、もう一段後退して週の取引を終えた。今週は、16日(火)に英10月失業率(社会保険需給ベース)、17日(水)に英10月CPI、19日(金)に英10月小売売上高など、9月末に英政府が一時帰休制度を廃止して以降の英経済の状況を確認できる指標の発表が予定されている。英中銀は、金融政策の先行きはデータ次第としており、こうした一連の数字が、同銀利上げ開始のタイミングに関する思惑を左右するはず。ポンドの値動き与える影響だが、強めの数字が年内利上げ観測を補強することで再びポンド押し上げに寄与する力よりも、弱めの数字に対する失望が年内利上げ観測を一段と萎ませ、ポンドに下押し圧力与える力の方が大きくなる、非対称な反応を見込む。

(3)先週末までの相場の推移

先週(11/8~11/12)の値動き: (対ドル) 安値 1.3354 高値 1.3608 終値 1.3411
(対円) 安値 152.38 高値 153.74 終値 152.77



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1)今週の予想レンジ: 0.7250 ~ 0.7450 81.80 ~ 85.30 円

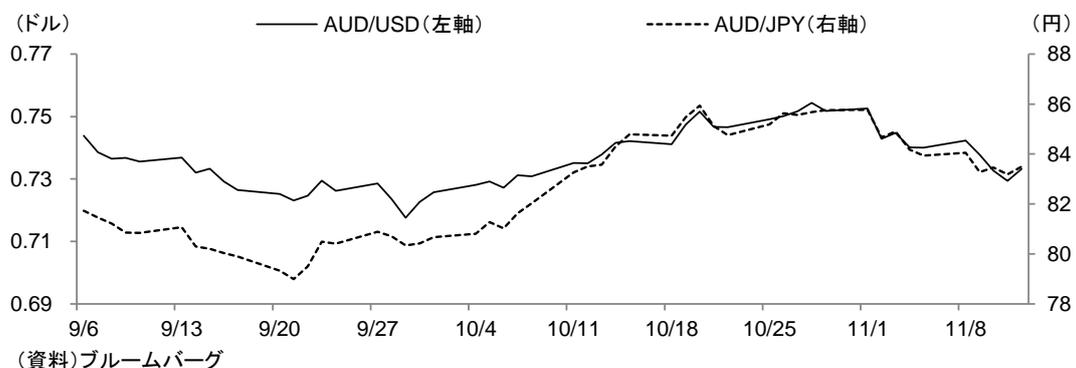
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.74台前半から一時0.72台後半まで下落。8日、前週金曜日に予想比堅調な米雇用統計の発表を受けて進んだドル買いの流れに巻き戻しが入った。豪ドルは欧米時間にかけて買いが優勢となり、0.7430近辺まで上昇。9日、主要コモディティ価格の下落などから売りが優勢となり0.74エリアまで下落。その後一旦0.7430近辺まで買い戻されるも、米10月CPIの発表を翌日に控え利益確定の動きから株価が下落すると、豪ドルも反落し0.7380あたりまで下落。10日、注目された米10月CPIは対前年比で+6.2%と1990年以来最大の伸びとなり、インフレ圧力の強まりが確認されると、米国債利回りは各年限で急上昇。ドルが大きく買い進まれたことで、豪ドルは0.7330エリアまで下落した。11日、予想外に弱い豪10月雇用統計を受けて売りで反応するも、一旦0.7320エリアでサポートされ、発表直後は意外と底堅い値動きに。しかしその後、じりじりと下落幅を拡大し、0.7290近辺まで下落して引けた。12日、前日からの豪ドル売りの流れが継続して軟調に推移。約1カ月振りの安値0.7277まで下落したが、すぐに買い戻され、米株上昇も下支えとなりながら、欧米時間かけて底堅い値動きとなり、0.7330で越週。

今週の豪ドルは下値固めを予想する。先週発表された豪10月雇用統計では、就業者数が前月比4万6300人減少した他(市場予想5万人増加)、失業率が5.2%に悪化した(市場予想4.8%)。今回の調査期間がロックダウン解除前を含むこともあり、指標発表後の相場の反応は大きくはなかったものの、前日の米10月CPIの大幅な伸びと対照的な結果となったことでフォロースルーの売りが膨らんだ。ただ今回の下落局面では、9月に付けた安値を更新することなく上昇反転しており、8月以降上昇レンジを形成している。今週は豪インフレ動向を見極める上で重要となる賃金上昇率が17日(水)に発表される。今後豪ドルが短期的に上昇トレンドに回帰できるかどうか、鍵を握る指標となる可能性がある為、結果に注目したい。今週は16日(火)RBA議事要旨に加え、17日(水)豪7~9月期賃金上昇率の発表に注目。

(3)先週末までの相場の推移

先週(11/8~11/12)の値動き: (対ドル) 安値 0.7277 高値 0.7432 終値 0.7330
(対円) 安値 83.00 高値 84.18 終値 83.50



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。